

<b>熊本まちなみトラストの取組み</b>		面談年月
熊本まちなみトラスト 事務局長 富士川 一裕 氏		H18年6月
(活動のフィールド) 熊本を中心に主に九州地方でご活躍		技術士(都市及び地方都市)、一級建築士、再開発プランナーの資格を有し、都市中心部の市街地整備を中核業務に市街地活性化関連業務(久留米市TMO構想策定業務など)、市街地再開発事業などでご活躍。昭和26年、熊本市生まれ。(株)人間都市研究所 代表取締役
<b>活動内容</b>		
<p>熊本市内にある大正8年に建造された「旧第一銀行社屋」の保存・活用運動を皮切りに、「記憶の継承」を基本コンセプトに据え、現在も多様な活動を展開している。</p> <p>〔 15年全国都市再生モデル調査実施先(熊本市河原町) 〕</p>		
<b>「都市再生の担い手」として事務局が注目した発言等</b>		
<p>「生活環境の回復」に目を向けたまちづくりを行うことで、まちづくりが誰にとっても身近な存在になる。まちづくり活動を行う上では「拠り所」と「発火点」が鍵を握る。</p> <p>使い手がいなければどんな建物も活かされないが、逆に使い手があればいかようにも活かされる。地域が一体となってまちづくりを行うには、ビジョンと情報の共有化をベースに「まちに投資」という考え方を普及させることが大切である。</p> <p>まちづくりの担い手は、できない事に対する「愚痴」から必要なことは自らが行う「自治」への発想転換を行うことが肝要である。</p> <p>行政、NPO、住民、商工業者等、多様な主体が同席する場合には、丸テーブルに互いが隣同士に座ることによって、ネットワーク形成が進む。</p>		
(写真1...旧第一銀行)	(写真2...河原町プロジェクト)	(写真3...街の駅)
		
(写真4...坪井川精霊流し)	(写真5...ペロタクシー)	(写真6...移築後の上熊本駅舎)
		

## インタビュー概要

### (富士川氏からの活動内容についての説明)

#### 河原町プロジェクト

- ・ 河原町地区は S32 に闇市が大火で消失し、跡地に繊維問屋関係の共同ビル(1 階は店舗、2 階は住居)ができたが、2001 年には殆ど空き店舗となった。
- ・ 2001.4「路地見て一杯」(現場の路地で飲み会)を開催し若者を集めた。その時の若者(参加者)が、2 年後の 2003.3 に共同ビル内の空き店舗に 1 号店をオープン。空き店舗の地権者との交渉で時間がかかり、1 号店オープンに 2 年かかったが、以後大学生や夫婦による子供服の店舗など入居が続いた。
- ・ 2003.12 都市再生モデル調査の採択を受け開店希望者の募集等を実施。
- ・ 2004 地域のイベント、2005 フリーマーケットを開催。これが一つのきっかけとなって、新規出店者と、地元の商工業者との交流が始まり、地元からも空き店舗へ出店する人たちが出始めた。まちの中心部に勤務していた者が退職して開業した例もある。
- ・ 現在は 20 店舗余りが開業している。
- ・ 中心部と異なり、安い家賃で商品単価も低く抑えてやっている。
- ・ 若者という「予期せぬ参加者」が本プロジェクト推進の原動力となった。

#### 新町・古町地区協働のまちづくり

- ・ 熊本市の新町・古町地区は、全体として歴史的な景観にはなっていないが、スポット的に歴史を感じる地区であり、地域住民と商業者が中心となって日常的な賑わいを取り戻す活動を展開。
- ・ 「街の駅」の社会実験として、店舗に街の駅の看板を掲げ、来街者にお茶やトイレ等のサービスを提供する活動を実施。2006 年からは本格実施を予定している。
- ・ 「生活環境の回復」に地域の人たちの目を向けることが、まちづくりの起動力となった。

#### 熊本ペロタクシー事業

- ・ 学生 2 人で NPO を立上げて、市民と学生によるまちおこし活動。まちなみトラストも応援し、コミュニティ財団を活用した家賃補助を実施。
- ・ ペロタクシーが交通手段になるのは機能的に難しいが、コミュニケーションの手段と観光スポットを結ぶ補助線として活用できればと考えている。
- ・ 病院・医院が地域に 40 箇所あり、ペロタクシー事業の賛同者になってもらい、患者さんに近くの停留所や薬局まで、また、通院のついでに近くを散策してもらうような使い方も面白いと考えている。
- ・ 前述の学生 2 名は就職せず、この活動を継続していきたい意向を有している。
- ・ 若者ならではの柔軟な発想が「ポップなまちおこし」につながったと考えている。

#### JR 上熊本駅舎保存活用

- ・ 高架化に伴い、大正 2 年築の JR 上熊本駅舎の取り壊しの話が持ち上がった。トラストでは、駅舎を残す会を通じて駅舎の保存活動を行い、駅舎の表部分を市電の停留所として移築活用することとなった。
- ・ 大学の学長が理事長、地元の自治会長が副理事長となり「上熊本駅舎を活かすまちづくりの会」として本年 7 月 1 日には竣工式を実施。また駅舎の近くのマンションの住民も、この駅舎があるからマンションに居住したなど、愛着をもっており、住民の「拠り所」と考えた。また、夏目漱石や小泉八雲のゆかりの地でもあり、そのことが駅舎を残す活動の「発火点」になった。
- ・ 活動をやっていく上では、「拠り所」と「発火点」が必要。先ほどの「路地見て一杯」も活動の発火点といえる。
- ・ まちなみトラストの活動は、「記憶の継承」と考えており、その中で上熊本駅舎を活かしたまちづくりの会の取組においては「拠り所」と「発火点」が十全に機能した。

#### 熊本大学まちなか工房の一連の活動

- ・ 熊本大学と共同で街の中にまちなか工房を設置するもので、2005.5 に開設した。

- ・ 工房は交流・研究の場として商店街の人が自由に出入りできる。また、商店街との学習会を月 1 回実施。
- ・ さらに、岡山、金沢、熊本の城下町 3 都市の交流シンポを実施し、中心市街地について比較研究を行った。
- ・ 大学の参加は、地域貢献に加え、学生への実践的な教育の場の提供として意義がある。

#### 熊本城 城下町 精霊流し

- ・ この事業は、会場準備、受付、灯籠を流すボランティアダイバー、流した灯籠の清掃等、河川の流域の各場面で協力して取り組んだもの。
- ・ 精霊流しを 60 年ぶりに復活させた。予算は 80 万円で、水門メーカーなど企業も参加。灯籠も 240 名から 1 人 1000 円で参加費を徴収した。市民の会を作って自らも金を出し、企業協賛も募って実施した。この事業はこれからも続けていけると考えている。
- ・ まさに、河川流域に関わる人たちの「流域コラボレーション」が結実した取組。

#### 佐伯市中心市街地活性化

- ・ まちづくり交付金事業でまちづくりを進めるにあたり、まちづくり協議会において粘り強い取組みを行った。
- ・ 街中の道路の改修にあたり、協議会の下に沿線の住民が参加した小さな協議会を作り、ワークショップなどを実施し、広がりを持った取組みを実施してきた。
- ・ 使い手がいなければどんな建物も活かされないが、逆に使い手があればいかようにも活かされるという教訓からこの手法を展開。
- ・ 徹底した「協議会方式の粘り強い展開」が奏功した。

#### まちづくりの原則

- ・ 行政と住民が一体となってまちづくりを行うには、ビジョンと情報の共有化をベースに「まちに投資」という考え方を普及させることが大事。

#### まちづくりの変局点

- ・ 熊本県も人口減の時代に入る。100 年後には現在の 180 万人から 90 万人に半減するといわれている。そのためには、今までの行政活動の仕組みを変える必要がある。それが NPO などの新しい「公」による活動である。
- ・ NPO ではワークショップなどで議論したこともすぐに取組めるが、行政では予算措置が必要なので、実施に至るまでには 1 年はかかる。できない事への「愚痴」から必要なことは自らが行う「自治」への発想転換が肝要。
- ・ 行政と NPO、住民、商工関係者などがテーブルに着くときは、丸いテーブルで互いが隣同士に座ることがネットワーク型社会にとって重要なことである。人的ネットワークを作りながらまちづくりを進めることが肝要。

#### 最後に

- ・ 再開発からまちづくりまで様々関わっているが、恩師である都市問題経営研究所の藤田先生から、まちづくりに普遍解は無理だと言われた。担い手として一般的にどうかは難しいが、上熊本駅舎の移築保存の例では、崇城大学が参加したことで動きやすかった。この取組みに関わった学生はまた別の場所の取組みや別の動きにも繋がる。さらに、新しい学生が継続して入ってくることによりまちづくりに継続的に関わることができる。そういう意味で大学は様々な応用問題を解くことができると思う。逆に商店街の場合、オリジナリティを持ったまちづくりの担い手が出現しても、一代限りで終結してしまうことがある。

( 質 疑 )

: 富士川氏 : 事務局

活動資金の確保についてはどのようにしているか。

- ・ 資金の確保にはどの団体も苦労していると思うが、資金を集める活動によりネットワークができる。活動は金勘定だけでやっているのではないので、金がないと活動できないと決めてはいけない。
- ・ まちなみトラストでもいろいろと事業に取り組んできたが、事業の実施のために資金を集めて毎年イベントを実施してもトラストの活動としては停滞感を感じており、消耗感がある。トラストでも自らが事業を実施するだけでなく、ペロタクシーや上熊本駅舎の保存への支援など中間 (= 担い手) 支援的な要素が出てきており、このような活度もやって行きたい。資金支援より一緒に事業をやるのが支援としては大きな要素と考えている。
- ・ 移築した上熊本駅舎では、近隣の住民が花を植えようとのアイデアへ専門家のアドバイスと資金的な支援の手伝いをしたがいへん喜んでくれた。支援金額の多寡より専門的なアドバイスなどの方法に工夫がいる。

熊本まちなみトラストの活動で行政の対応等に変化はあったか。

- ・ 熊本城の河川で行った精霊流しは、60年ぶりに復活したが河川管理者も河川を利用することに対して理解を示してくれるようになった。河川の利用については大きく管理者の対応が変わった。他の市民活動団体もそのように考えている。
- ・ 道路の利用については、道路管理者も警察も都市再生モデル調査の採択されたことから商工会議所が働きかけてくれうまくいった。
- ・ 上熊本駅舎の解体に関するワークショップについて、トラストから行政に参加を促し、行政関係者が参加してくれたが、各々職務の立場があり創造的な討論にはならなかった。行政の関係者からは、移築保存にはお金がかかるというイメージが大きかった。しかし、移築には1億円以内という具体的な金額を提示したところ、県・市で折半(約3,000万円ずつ)ということになった。トラストでは、それと同時に大学の学長や文化団体、マスコミなどを使って移築保存のキャンペーンを行った。このような取組みに行政がリーダーシップを発揮することは難しいと感じた。

抛り所と発火点についてももう少し具体的な話をしてもらいたい。

- ・ 言い出したものが発火点になる。新町・古町地区協働のまちづくりも地元人がいたからである。その場所に人がいないと発火しない。ただ、発火する人は最初からはいないから、発火する人を捜し発火するように促すことが必要。資金の確保もないとできない。それをトラスト(富士川氏)はやってきた。
- ・ しかし、発火をゼロから行うことは困難。発火するには何らかの「種」がある。「種」になる人は、仕事以外で何かを一生懸命に取り組んでいる人であり、そういう種になる人を捜して支援する。トラストではそのような人からの相談にも丁寧に対応している。あまり深刻に活動を考えると、成功や継続は難しくゆとりも必要でありそのようなアドバイスもしている。

担い手(発火点になる人)交流などの全国的な取組みについてはどのように考えるか。

- ・ まちづくりの全国大会では、同じ様な問題で苦労していることはわかった。離れているからこそ参考になるところもあると思うが、そこから次の段階へ進めるかどうかについては疑問を持っている。
- ・ 「知る」と「やる」とは別次元の問題として捉えらるべき。「知る」と言っても無限大に知ることは無理。ネット・ワーク化については、近場の人同士がつながることが基本。

- 中心市街地の活性化で九州経済産業局と一緒に九州の3～5万都市3ヶ所で事業を実施した。3ヶ所の交流を呼びかけだが地域が乗ってこず結局できなかった経験がある。
- 相談する相手は人口10万以下では難しいのではないか。私(富士川氏)には、熊本市に大学の先生、県・市の行政職員など相談できるメンバーが20人程度いる。地方として調度良い規模である。逆に博多規模の都市になると大きすぎて、人と人とのつながりを構築するのは難しいのではないか。
- まちなみトラストとしては、市民活動に行政は個人として参加することはよいが、肩書きを持って参加すると市民からの要望が行われてしまう。普通の関係で行政の職員も市民活動に参加できれば良いと思う。
- 担い手が重要であることには共感するが、まだ整理が不十分な状況ではないかと思う。